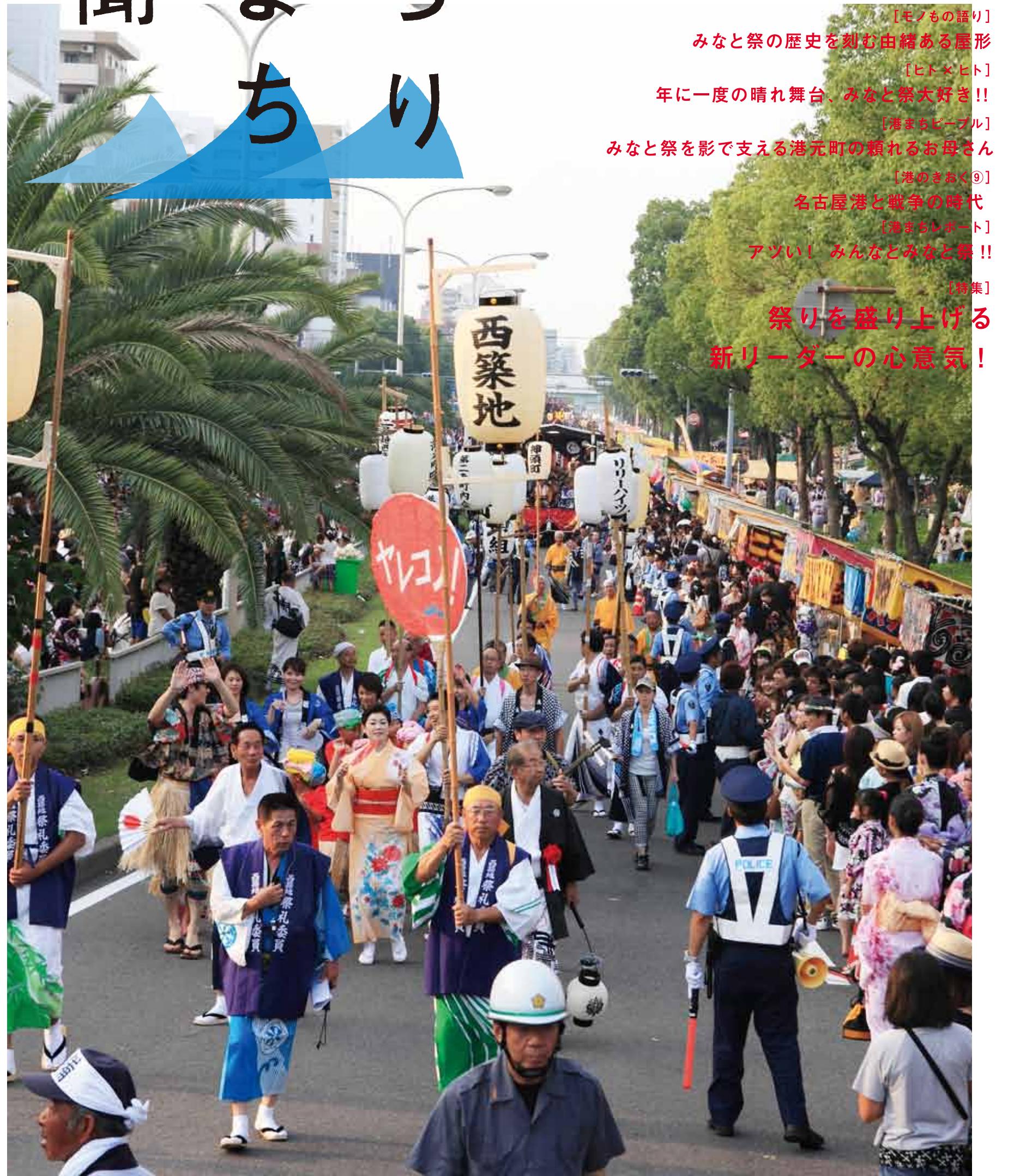


FREE
ご自由にお持ち帰りください。

2014.08
09
なつ号

新聞 港まち ぶらり



港まちづくり協議会「ぶらり港まち新聞」

なごやの
みなとまち

[モノもの語り]
みなと祭の歴史を刻む由緒ある屋形

[ヒト×ヒト]
年に一度の晴れ舞台、みなと祭大好き!!

[港まちピープル]
みなと祭を影で支える港元町の頼れるお母さん

[港のきおく⑨]
名古屋港と戦争の時代

[港まちレポート]
アツい! みんなとみなと祭!!

[特集]
祭りを盛り上げる
新リーダーの心意気!

ぶらり港まち新聞 15

港まちづくり
協議会の
スタッフが
アレコレ

港まちづくり
協議会
スタッフが
アレコレ

まち協メガネ



●企画・編集

佐藤嘉宏 (monogram)
吉橋敬一 (港まちづくり協議会)
阿西康太 (港まちづくり協議会)
西井彩華 (港まちづくり協議会)

●取材・文

谷 重由子 (なごやのたからものプロジェクト)

赤澤ゆかり (編集企画室 群)

花島敦子 (編集企画室 群)

●アートディレクション・デザイン

青木奈美 (COUPURT)

●撮影

児島章次 表紙、p.1~10

●マンガ

前田守彦 (たかのもちぐされ屋)

●印刷

東浦共同印刷

●発行

港まちづくり協議会

T455-0037 名古屋市港区名港一丁目20番3号

(平成26年9月移転予定)

TEL 052-654-8911 HP minnatomachi.jp

MAIL info@minnatomachi.jp

月曜日・金曜日、9時~18時

(祝日・年末年始を除く)

※港まちづくり協議会では、ボートピア名古屋設置に伴い競艇を実行する自治体（蒲郡市など）から名古屋市に交付される「環境整備協力費」を用いたまちづくり事業を、住民と行政との協働により検討・実施しています。

港まちへのアクセス

【名古屋駅から約25分】

市営地下鉄東山線「栄」駅のりかえ。

名城線金山方面「名古屋港」行き、「築地口」駅、「名古屋港」駅(終点)下車。

【金山駅から約10分】

市営地下鉄名港線「名古屋港」行き、「築地口」駅、「名古屋港」駅(終点)下車。



祭りでつくられる港まちの風土



「みんな祭お疲れさまでした！」ここ数日の港まちでは、そんな時候のご挨拶が聞こえます。それはあの2日間を体験した人たちだけのとつておきのご挨拶。花火や夜店を楽しむだけでなく、屋形を引き、太鼓や鑼を打ち鳴らし、輪になつて踊る。そんな日本の祭りの原風景を、今も変わらず自分たちの手で創り上げる。みんなとまちの祭りを通して、目上の人をうやまい、次世代を愛おしむ地域の風土が培われていく。港まちのつながりの深さは、この祭りのおかげなんだなあと改めて感じました。

上の写真は、今回の取材でご協力いただいた「二号地東部町内会の子供たち」。最盛期は25名を越えた子供たちも年々少なくなっているとか。でも、どこの誰の子か全部わかる。地域の大好きな子供たちだと語る町内会長さんの優しい笑顔はとても印象的でした。

さて、今号の特集では「真砂町内会の太鼓」「真砂会」のリーダーに注目。そこに見えてきたのは、お互いがお互いを支えあう、魅力的な人のつながりでした。「ヒトヒト」と「ビープル」では、みなと祭が身体にしみ込んだ皆さんの姿を追いました。それぞれの人のお話なのに、なぜかみんなが共感できるそんな素敵なお話です。「モノもの語り」では、町内の歴史が刻まれた屋形や道具を。愛着を持つて使い込まれていく道具だけが纏う特別な魅カストリーがそこにはありました。「港のきおく」では、戦争の時代について。困難を乗り越えてきたまちの記憶は、いつかの未来を支える糧となるでしょう。そして「港まちレポート」では、今号の取材で出会った皆さんの笑顔の数々をご紹介しています。今号もおかげさまでいい新聞になりました。じっくりお楽しみください。

02. 軽快に祭囃子を奏でる小太鼓



練習を重ねて迎える晴れの日
子供たちの真剣な表情にも注目
お祭りの屋形に欠かせないのが
「鳴りもの」です。「入船丸」の荷台の上には大太鼓が1つに小太鼓が4つ。さらに屋形の下には2つの鐘。踊りの曲がかかるとそれぞれの楽器が息を合わせて祭囃子を奏でます。中でも花形の大太鼓は子供たちの憧れの的。でも大太鼓が叩けるようになると中学生成ってから。小学生以下の子供たちは主に小太鼓と鐘を担当します。練習は毎年祭りが近づく6月ごろ

から始まり、厳しい暑さの中で町内にある車庫などを利用して行われます。昔は太鼓の代わりに分厚い電話帳を使って練習していましたが、最近ではタイヤを使っていながら、最近ではタイヤを使っていながら大切に使います。

03. 鐘を叩くバチ



鐘の音色を決めるバチ
修理をしながら大切に使います
屋形の練り歩きでは迫力あるバチさばきも見どころのひとつ。しかし本番ながら熱のこもった練習中には何本ものバチが折れたりしてしまいます。毎年何本かは新しいものに買い替えなければなりません。なかでも頭の部分が鹿の角でできている鍾用のバチは少々値の張る貴重なものなので、少しぶらいの破損ならば丁寧に修理ができる長い間、使い続けるように工夫しているそ

うです。たとえば細い柄の部分が折れた場合には菜箸を利用して木の年輪のように層があるため柔番。子供の数が大勢だった時代は何人かが交代で太鼓を叩いていましたが、最近は子供の数もめつき少なくなり、一度乗り込むと一日中ほとんど交代なしで演奏をします。観客たちの注目を浴び汗を流して太鼓を叩く子供たち。きっととした表情は大人も顔負け、真剣そのものです。

01. 歴代屋形の面影を継承する3代目『入船丸』



モノもの語り

二号地東部の屋形で
見つけたモノ語り

戦争で焼け野原となつた築地で、戦後間もなく始まつたみなど祭。港にもっとも古い地区・二号地東部で長年祭りに参加し、当時の様子を記憶する語り部の皆さんに、お祭りや屋形にまつわるお話をうかがいました。文／谷亜由子



初代は当時まちにあった馬車屋さんから譲り受けた馬車の荷台を利用した木造の屋形でした。3代目の現在は頑丈な鉄骨製。

築地の夏を盛り上げる
じしまんの屋形

今年で68回を数えるみなど祭は、名古屋港の夏の風物詩。始まりは昭和21年の10月に開かれた「名古屋復興祭」。港の戦後の復興を願つてのことでした。屋形船をかたどつた「屋形」と呼ばれる山車が町中を練り歩く光景は、港まちのお祭りならでは。町内ごとに個性の異なる屋形や神輿。お揃いの浴衣を着た踊り子さんたちの踊りと太鼓や鐘の音が2日間、まちを華やかに彩ります。多くの人が訪れる花火大会と共に、いまではみなど祭のもう一つの呼び物となっているこの屋形ですが、復興祭当時には1台もありませんでした。復興祭後に地元の人たちの「自分たちで港を盛り上げたい」という思いからみなど祭が始まつたのを機に、各町内が趣向を凝らし、まちを愛する気持ちを込めた屋形が次々に誕生してきました。二号地東部の屋形は3代目「入船丸」。初代からの特徴を受け継ぐ正統派の姿が魅力です。祭りの度に丁寧に整備をしながら大切に守り継がれています。





みなと祭を影で支える港元町の頼れるお母さん

港まちに嫁いで33年。来たばかりのころは祭りのことは何もわからず、隣町の練習に参加してしまったこともあったという島崎恵都子さんも、今や祭りを全力でバックアップする頼れる存在。「祭りに参加しなければ何でここに住んでるかわからない」と汗拭いながら笑う恵都子さんの大忙しの一日を追いました。



町内の屋形で踊りに参加する踊り子さんたちの浴衣の着付けも快く引き受けます。慣れた手つきで着付けていく手際の良さはつい見とれてしまうほど。和服を着慣れない男性には「帯は前をぐっと下げて、後ろは高めに腰で留めて。そうするとかっこいいよ！」と、美しいこなしのアドバイスも。



地元・港元町の屋形のまわりに集まる子供たちに、冷たく凍らせた様なジュースを差し入れ。人数が多いのでなんと台車に乗せて運びます。「みんなにあげようと思ってスーパーで安売りのときにまとめて買って冷やしとくの」。夏の暑さ真っ盛りの中で縁側広げられるみなと祭。冷たいおやつに子供たちは大喜びです。



祭りの合間に入れ替わり立ち替わりやってくるまちの人や屋形のお雛さんたちに、お手製の「さくらもち」を振る舞います。この日、一升の米を炊いて50個を超える数のさくらもちを恵都子さんひとりで作りました。ご近所さんたちにもすっかりおなじみの味。みんな口々に「おいしい！」と大好評でした。



2日間にわたって行われたみなと祭もいよいよ終盤。全町内の屋形が列をなして江川線をパレードする最後の流し踊りがこの日一番の見どころです。太鼓や鐘を打ち鳴らし出発する港元町の屋形を自宅でお見送り。その表情には、今年も祭りが無事に終わろうとしている安堵感とちょっぴりの寂しさが入り交じっているようでした。



年に一度の晴れ舞台、みなと祭大好き!!

築地神社のお膝元・神頭町。七代目玉屋庄兵衛作のからくり人形が乗った自慢の屋形で太鼓を打ち鳴らし練り歩く若手たちの中、粋な祭り半纏姿がひときわ目を引いていた美女ふたり。祭りが縁で仲良くなって5年。夏がくるともうじつといられなくなっちゃうのです。

梨恵さん 楽しい！もうどんどんはまっちゃう。でも…太鼓が楽しい？

可奈美さん 私が初めて参加したのは5年前。可奈美ちゃんと共通がいつだったか覚えてないくらい。の友だちがいて、その子が誘ってくれて。それまでは見てるだけだったんだけど、あるとき「かっこいいよ」「つてひとこと言つたら『俺もやつてから入つてみる？』って。それがきっかけだつたんですよ。

梨恵さん ね～「つてひとこと言つたら『俺もやつてから入つてみる？』って。それがきっかけだつたんですよ。

可奈美さん 楽しい！もうどんどんはまっちゃう。でも…太鼓がまあ～難しくて。入ったはいいけど全然叩けない。可奈美ちゃんを超えるなんて絶対無理！でも無理って言うと「死ぬ氣でやれ！」って怒られる（笑）

梨恵さん あはは！だって私は子供の時から祭りに参加するのが当たり前の環境で育ったしさ。祭りにはまるるっていうより、家族揃っての夏の恒例行事だから。そうだけね～可奈美ちゃんとはお母さんもベテランさんだもんね。

可奈美さん 今日も屋形の上で張り切ってマイク握つてる。「みどりちゃんの娘」って言えば知らない人はいないくらい（笑）。そんな私にとっては、太鼓が難しいとか練習が大変っていう時期はもうどっくに通り越しちゃった。これから若い子たちをどうやって育てていくかっていうことを考える立場になってきたね。

梨恵さん でも祭りが大好きなのは同じ！普段はお互い家庭のこともあります。だからやめられないんだよね！

可奈美さん そうだね。

梨恵さん 毎年、大通りに出る直前のこの気分は何とも言えない！

可奈美さん 快感だね。緊張っていうより武者ぶるいに近い感覚。

梨恵さん そうそう。だからやめられないんだよね！

可奈美さん うん、やめられないね！

*お祭りにはいつから？
可奈美さん 私は25年くらいかな？もうずっと出でる。初めてがいつだったか覚えてないくらい。



「名古屋みなと祭」当日の、流し踊りのようす。各町内の踊り子さんが揃って踊りながら大通りを進む姿は圧巻。その後ろから屋形と太鼓衆が威勢よく続きます。



アツい！みんなとみんなと祭!!

今夏で68回目を迎えた名古屋みなと祭。公式発表ではおよそ37万人の人々が港まちに訪れたとか。
ここでは、そんな大盛況だったみなと祭への私たち港まちづくり協議会の取り組みを中心にレポート

文 / 港まちづくり協議会事務局

ヤレコノ！

みんなとまちで踊



今回お祭りの前日、昨日と取材をする際に、事前にいくつかの町内の太鼓練習も見学させてもらいました。てっきり他の町内はライバルだ！という関係なのかと思つていたら、他の町内に太鼓を教えていたり、練習後にみんなで集まつてご飯を食べたりすごく仲

太鼓もカツ一いり

に引つ越してしまつた人もこの田だけは帰つてくる。お祭りの2日間は他人という壁かべが取り払われ、つながる楽しさがグッとみんなの距離きよりを縮ちぢめてくれる。私たちもそんなムードのなかに、温かく迎え入れてもらつたように感じています。祭りが人ととの距離を近づけるつて本当なんですね。

お囃子など町内の練習が始まります。本番までの約半月はほぼ毎日練習。初対面の方も多かつたですが7月からの練習で何度も顔を合わせていくうちに、祭りへの熱い思いやこのまちについて、普段ではうかがえないようないろんな話を聞くことができました。練習の辛さや大変さ、それが本番になると一気に喜びになる。

手にマメを作りながらも楽しそうに太鼓を打つ姿はとても生き生きしていました。

今回の取材に参加して一番印象的だったのは、たくさんの素晴らしい笑顔に出会えたこと。普段から事務局のスタッフとして働いていますが、こんなにもたくさんの人に出会い、話し、カメラを向けてもらつたことは、初めてでした。みなと祭のおかげで、皆さんとお近づきになれたような気がありして、とても嬉しい気持ちになりました。

男女関係なく「カツ」「いいなあ」と思われる魅力がそこにはあるの

大切なこと

みなと祭は、家族や、友達が集まらるる盛り上がりのようならぬ。外月からは踊りはらうとい、太鼓っ

祭りから学んだ

に100名ほどの各町内の踊り子たちが今年の踊りを習い、7

たくさんの素晴らしい笑顔に

たにしたのでした(笑)。

たちにも親しまれています。

今年は、3月に開催された伝統芸能イベントの「名古屋みなとをどり」で誕生したオリジナルキャラクターの浦島次郎さんといベント出演者だった稻永学区の子供たちも加わって、「みなとヤレコノ！ 子供連」が結成され、流し踊りに参加させていただきました。子供たちは可愛かったのですが、浦島次

参加者の皆さんに「みなと祭で一緒に踊りましょう！」と呼びかけるなか、今年はなんと20名を越える方がさまざま地域からご参加くださいました。事務局メンバーや、そなな皆さんと一緒に各町内の盆踊り練習に参加。しかし、いざ参加してみると各町内のみんなさんの熱気溢れる指導に終始圧倒されっぱなし（汗）。改めて港ま

ヤレコノ！

昨年度からNPO法人『大ナ』「ヤ大学」と、「踊る！みなと祭」と題し、花火や露店だけではない本題に、花火や露店だけではない本当に本格的に参加するようになつて、当のみなと祭の魅力をお伝えする授業を開催。参考した生徒の皆さんから、「地域で回すみなと祭」など祭には外から来ても地元のよさに感じられる魅力がある」「地域の人たちと関わることがこんなに心地いいことだとは思わなかつた」、中には「地元の人たちに着付けをしてもらつたときの女子トークが面白かった」などの嬉しさで、地学区女性会の踊りグループを中心にして、港まちのみなさんに踊り継がれており、大人だけでな